

「超高齢社会」について思う

最近、沖縄タイムスに「超高齢社会に生きる」というタイトルで連載記事が載っています。現在第2部の「**老いと住まい**」がテーマで、お年寄りの住居が決まらず、家族が右往左往している様子が浮かんできます。日本の人口、**4分の1が65歳以上**という「超高齢社会」が現実味を帯びてきました。子どもを相手にしている小児科医の私は、これまでこの現実に余り実感がありませんでした。

しかし、予期せぬことが身に起こりました。母親（86歳）が数か月前に転倒し、大腿骨の骨折で手術を受け、現在、入院してリハビリ中なのです。手術を受けた病院は急性期の病院で20日間しか居られず、慢性疾患を対象にした関連病院に転院しリハビリ、但しそこも2ヵ月間という縛りがあるために退院を余儀なくされています。

一人暮らしの自宅は2階で、階段の上り降り、風呂、トイレ、炊事など骨折する前までは何とか自分でやれていたのですが、退院後は介護なしでは生活ができない状態なのです。歩くのも不安定でまた転倒しかねません。

そこで一時的でも介護老人施設に世話になろうと考えていたのですが、**介護認定で「要支援2」と判定されたこと**で、ほとんどの施設に入所できず**にいます**。介護老人福祉施設、介護老人保健施設、介護療養型医療施設などありますが、**「要介護」という認定がないと入る資格がない**という事です。例え「要介護」と認定されても今は空

きがなく、待機状態という事でした。

自宅には戻れず、と言って介護施設にも入所できずにいる中途半端なお年寄り**はきっと少なくない**と思われます。特に那覇市は財政の問題でしょうか、認定にはかなり厳しく判定されているようです。那覇市で「要支援」と認定された人でも、他市町村に移って再度認定してもらったら「要介護」になった事例もあるようです。

一割負担で済む介護保険はお年寄りにとっては有難い保険制度と思いますが、**「要介護」と認定されない人は有料老人ホームに入る**こととなります。そこでは保険適応はなく、すべて有料ですので家族の負担は少なくありません。

新聞の連載記事によると月に20～40万円ほどかかり、自分の家族、子ども達への出費と共に、親までも面倒を看なくてはいけない金銭的問題が大きく、それを苦にして自殺を試みるお年寄りが居ることも分かりました。

母は沖縄県立一高女出身で、ひめゆり部隊の生き残りの一人です。同世代のお年寄りは過酷な戦争を生き延び、今日の日本の繁栄は彼らの努力の賜物と思います。せめて老後は安心して住める世の中になってもらいたいと節に思うこの頃です。6月23日は「慰霊の日」です。毎年ひめゆりの塔を参拝している母ですが、今年**は某有料老人ホームで過ごすこと**になるでしょう。（たまなは）